

口腔扁平上皮癌における抗癌剤および血管新生阻害剤による浸潤・転移抑制効果の検討

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-05-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Kawashiri, Shuichi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00061165

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



[◀ Back to previous page](#)

口腔扁平上皮癌における抗癌剤および血管新生阻害剤による浸潤・転移抑制効果の検討

Research Project

Project/Area Number	14771125
Research Category	Grant-in-Aid for Young Scientists (B)
Allocation Type	Single-year Grants
Research Field	Surgical dentistry
Research Institution	Kanazawa University
Principal Investigator	川尻 秀一 金沢大学, 医学系研究科, 助手 (30291371)
Project Period (FY)	2002 - 2003
Project Status	Completed (Fiscal Year 2003)
Budget Amount *help	¥3,800,000 (Direct Cost: ¥3,800,000) Fiscal Year 2003: ¥1,500,000 (Direct Cost: ¥1,500,000) Fiscal Year 2002: ¥2,300,000 (Direct Cost: ¥2,300,000)

Keywords 口腔扁平上皮癌 / 浸潤 / 転移 / 増殖 / シスプラチン / ヘプロロマイシン / 血管新生阻害剤 / 正所性移植モデル

Research Abstract

口腔扁平上皮癌の浸潤と転移を臨床に近い状態で再現できる正所性移植モデルを用いて、特に日常の臨床で使用している抗癌剤に増殖のみならず、浸潤や転移に対する抑制効果があるのか否かを検討した。高浸潤高転移性のヒト口腔扁平上皮癌細胞株のOSC-19細胞をヌードマウスの口底に移植した後に、シスプラチンまたはヘプロロマイシンを移植後7日目または14日目に投与し、各抗癌剤ならびに各投与時期の違いによる腫瘍増殖に対する効果、浸潤に対する効果、転移に対する効果について検討した。増殖抑制効果では抗癌剤投与により平均38%の腫瘍縮小効果が認められ、PCNA陽性細胞率も有意に低下した。対照群の口底腫瘍は4C型の浸潤様式を呈していたが、抗癌剤投与群の浸潤様式は3型が72.7~81.8%と多く、いわゆる浸潤様式の抗癌剤投与によるダウングレードが認められ、抗癌剤投与によって腫瘍の浸潤抑制効果が観察された。対照群の頸部リンパ節転移形成率は90.9%であったのに対して、抗癌剤の7日目投与群ではリンパ節転移形成率は45.5%と有意に低下し、また転移リンパ節内での腫瘍進展度も抑制されていた。また、血管新生阻害剤(TNP-470)を本モデルに同様に使用し、増殖、浸潤ならびに転移抑制効果の有無についても検討を行った。その結果では、増殖、浸潤、転移にそれぞれ一定以上の抑制効果が認められた。しかし、本剤においては特に局所腫瘍の増殖に対する効果が大きく、それにつれて浸潤や転移の時期が遅くなっている印象であった。

Report (2 results)

[2003 Annual Research Report](#)[2002 Annual Research Report](#)

Research Products (1 results)

All Other

All Publications

[Publications] Kawashiri S., Tanaka A., 他: "Efficacy of neoadjuvant chemotherapy on metastasis of oral squamous cell carcinoma in a mouse model." Oral Oncology. Vol.9. 225-228 (2003) ▼

URL:

Published: 2002-03-31 Modified: 2016-04-21